

# 奈良高専 図書館だより

## 記事

1. 読書の集中型と自由型と
2. 読書感想文コンクール  
総評と作品
3. 夜間のカウンターから

1991年3月 奈良工業高等専門学校図書室 発行

## 読書の集中型と自由型と

教務主事 小谷 稔

お年玉の入る正月の1ヶ月は、学生諸君のフトコロ具合の最もよい時期である。この豊かなゆとりの金  
がどのくらい本に使われるのであろうか。

1991年1月30日、この1ヶ月に買った本(雑誌を含む)の冊数を1年と2年の3クラス、114人に聞いて  
みた。全員を合わせて雑誌282冊、文庫本107冊、参考書16冊、単行本(漫画を含む)128冊であった。  
雑誌は平均1人2.5冊買った計算になる。本屋をのぞいて見ても雑誌の洪水である。その洪水の中で諸君  
もおぼれかけていることは、参考書を16冊買ったという数字が如実に示している。しかし、参考書という  
ものは、学年初め、前期に買うのが普通であるからこの16冊は殊勝というべきか。私の1月は、雑誌2冊、  
文庫本3冊、単行本2冊でささやかなものである。

雑誌の時代が象徴するように本も「重厚長大」がはやらなくなっている。それほどむずかしい本でなく  
ても、今の学生諸君は「本をよく読む」ことをどう見ているのであろうか。

やはり、上記の114人の回答では、「暗い」と答えた者20人、「かしこい」が62人、「孤独」というの  
が45人あった。今の若者は、何でもまじめなことを「暗い」の一言で片づける風潮があるが、本も読まず  
に、つまり自分の考え方もきたえずに流行に流されるのが「明るい」のであろうか。

学生が本を読むのは、料理人がほうちょうを持つように当然の姿である。それを「かしこい」と見るの  
は、読書が特殊なものになったからであろうか。本を読む営みは「孤独」である。「孤独」と答えた人は、  
どんな意味づけをしているのであろう。マイナスのイメージであろうか。

人生観を形成する青年期では、集団の中で自己の役割や個性を知り、もまれたり傷ついたりしてい  
くうちに人格をつくる。このとき、集団で吸収したものを自分一人の孤独の中で、考え直し、消化し、自分の  
ものとして構築し直す。集団と孤独の往復によって確かな自己が育つ。読書はその孤独と共にある。

次にある外国の文豪の書いた小説の名を並べてみる。作者はだれでしょう。未成年、悪霊、賭博者、死  
の家の記録、貧しき人びと、虐げられた人びと、地下室の手記……。まだまだあるが十年ほど前の学生A  
君は、この作家の作品を全部読んでいた。「悪霊」上下だけでも文庫本で約1,100ページもある。ほかに  
も長編が多く、罪と罰、カラマーゾフの兄弟、白痴など。

読書のやり方もA君のように一作者に集中する集中型と気の向くままにあれこれ読む自由型がある。ど  
ちらにも長短があるであろう。集中型は深い狭い。自由型は広い浅い。研究家タイプと営業マンタイ

プがあるようにその人の適性がどちらかを選ぶ。前記のA君は、人間関係の複雑な「悪霊」を読むとき、自分で人物関係図を作成して、座右に置いて読破した。だれにも教えられずに、その読む熱意がテクニックを開発したのであった。A君の集中力は、勉強の方にも発揮されて推薦による大学編入学を達成した。その集中力と柔軟さが彼を大きく成長させたように思う。これと対称的に自由型のタイプで活躍しているアイデア豊かな人も多いはずである。

今回の114人の調査では、学生の自己評価で、集中型と思うという者が40人、自由型が44人あった。ほぼ半々の割合である。諸君は若いのでどちらの型であるにしても、他の型の長所をほどよく採り入れるのがよいと思う。

終わりに60歳をとうに過ぎた私が若い諸君に言えることの一つ。それは、10代、20代のころは、努力もせず読みたくて本を読み、努力もせずにいまだに頭に焼きついている。40代、50代で仕事の必要から相当多くの本を読んだが、努力して読みながら、忘れることの早いこと。つくづくと思う。

(上記の文豪は、ロシアの作家ドストエフスキー)

■■■■■■平成2年度■■■■■■

## 読書感想文コンクールを終えて

### 図書館委員会

毎年行われている夏休み課題図書(3年生以上は自由選択)の読書感想文コンクールは、今回で15回めになります。応募作品513編の中から、図書館委員会と国語科の先生方が慎重に選考した結果、次のように11名の諸君の入選作を決定しました。ここに氏名を紹介して、その栄誉をたたえたいと思います。

#### 〔第1部：文学の部〕

最優秀	3	C	今中見名子
優 秀	3	C	内田 真紀
佳 作	2	I	谷山 明子
佳 作	1	C	泉 真由美
佳 作	2	MA	今岡 秀樹
佳 作	4	MA	清水 裕士

#### 〔第2部：文学以外の部〕

最優秀	1	E	金 圭史
優 秀	2	I	西岡 正隆
佳 作	2	E	裏谷 豊
佳 作	3	E	下村 信仁
佳 作	3	I	高橋美帆子

この他に、選考の過程で優れた評価を得た諸君は次のとおりです。氏名を記してその努力をたたえたいと思います。

1 M 榎本 徳弘	1 M 水野 征次	1 S 九重 嘉哲	1 S 中居 亜子
1 E 原田 寛之	1 I 大規 典正	1 I 松永 哲	1 C 清水 大雅
2 MA 松本 充司	2 MB 矢嶋 洋智	2 MB 山本 祐司	2 E 坂元 宏之
2 C 宝田 晃	2 C 川上健太郎	3 MA 松谷 仁臣	3 MA 永井 久也
3 MB 福田 敏孝	3 MB 宗重 倫典	3 E 布元 伸卓	3 I 中井 誠樹
4 MA 細井 紀夫	4 MB 豊田 哲郎	4 MB 森本 広一	4 E 菊地 広寿
4 E 大門 建三	4 I 大西 祐史	4 I 柴田 修	4 C 樺 善徳
4 C 中谷 秀和	5 C 羽田 知由		

選考の仕方は、昨年と同様に〔文学の部〕と〔文学以外の部〕の2部立てとし、それぞれの部門から最優秀、優秀、佳作を選んであります。

1・2年生の課題図書では、330編の応募提出がありました。その対象作品の内訳は、数の多い順に並べると次のとおりです。

## 〔文学の部〕

いまを生きる (クラインバウム)	121
我利馬の船出 (灰谷健次郎)	36
漂流 (吉村 昭)	30
オイディプス王 (ソポクレス)	29
縦走路 (新田 次郎)	24
敦煌 (井上 靖)	5
赤ひげ診療譚 (山本周五郎)	4
ラブ・ストーリー (シーガル)	1
卒業の夏 (ペイトン)	1
夢をみた海賊 (なだいなだ)	1
その他	5

## 〔文学以外の部〕

まちがったっていいじゃないか (森 毅)	24
旅人 (湯川 秀樹)	23
緑の冒険 (向後 元彦)	12
未知の国 すばらしい人たち (田沼 武能)	4
オモニの歌 (岩井 好子)	3
日出る国の工場 (村上春樹他)	3
学校・学歴・人生 (森嶋 通夫)	1
ボクの音楽武者修行 (小澤 征爾)	1
その他	2

また今年度から、3年生以上は自由選択（これまでは4年生以上）となりましたが、その自由選択では183編の応募提出がありました。その対象作品の内訳は、漱石など近代文学の古典から村上春樹など現代作家の作品まで、巾広く取りあげられています。司馬遼太郎や吉川英治などの歴史物も人気があるようです。文学作品以外では、社会問題や時事問題を扱ったものが目につきました。多様な作品が対象となりますので、著者が誰なのか分からないものもあります。感想文の末尾には、著者名と出版社名を是非書き加えておいて下さい。

何年生の作文か学年も考慮に入れながら選考し、その最終段階では13人の先生方の投票によって決めました。総じて今回の応募作品もよく書けており、懸命に取り組んでいる諸君の熱意が伝わってきて好感が持てます。選考するのは苦しい作業ですが、諸君の真剣さに励まされてやり終えることが出来ました。「読んでよかった。」との一言に出会うと、疲れも吹き飛んでしまいます。

入選作はいずれも、自分の目でしっかりと見、深く考え、的確な表現に努めており高く評価できます。次に、その入選作を紹介しますので、読み比べて参考にして下さい。

## 〔第1部 文学の部〕

## 「絞首刑」を読んで

(ジョージ・オーウェル著)

3 C 今 中 見名子

私は、「絞首刑」という非日常的な題名に興味を持ち、この小説を選んだ。話の内容は事実に基づいたものだ。イギリスの植民地ビルマで、一人のアジア人に対する絞首刑が執行される。主人公である「わたし」は支配者イギリス人の一人としてそれに立ち合う。アジア人の手で行なわれる刑の実務のながれや、日々変化のない景色、囚人の行動、それらを眺める「わたし」は、囚人のわずかな行動に、真実の認識者として目覚めさせられる。この小説は、文字を目で追ううちに読み終えてしまう程度の短いものだが、中味は濃いと私は

思う。

私は「絞首刑」を読んで、最初には、淡々とした日常の中での死の扱われ方に違和感を抱いた。絞首刑の現場にいる人々にとって、刑の執行は日常の延長上の事柄でしかなく、ズラリと並ぶ独房の囚人は、近日中には絞首刑になる運命なのだ。毎朝一人の死刑執行は、朝礼のようなものなのかもしれないと思う。死刑執行の号令の後、死体確認をすませ、「八時八分。さ、今朝はこれで終りだ。ありがたい。」と言う場面がある。平穏な日常の営みの中に「死刑」が当然のように肩を並べているのだ。絞首刑が日常生活の一コマになりきっているために、関係者たちは、一つの生命を奪うことに対して感覚を麻痺させられてしまっている。それが、不思議なほどあっさりと言われていると私は思った。

先に書いたような日常にあって「わたし」にも、意識のある一人の健康な人間を殺すというのがどういうことなのか、分かっていなかった。私はそ

の事実について、決して誰をもせめる事はできないと思った。生活環境によって、その人の認識は変化することもあると私は思う。人はみな、生まれた時から、たくさんの出来事を吸収し消化し、それを選択し理解し記憶し、また忘却する。その過程の中に人間性が現れるのではないか。だからこそ「わたし」は真実の認識者となり得たのだと思う。小説から引用するならば、「その囚人が水たまりを脇へよけた時、わたしは…言葉では言いつくせない誤りに気づいた。」という場面で「わたし」は目覚めたと思われる。「水たまりをよける」のは日常では特に目につく行為ではない。しかし、囚人におけるその行為は何を意味するのか？死を真近にしているのに——。「わたし」が気付いた事は、恐らく次のようなことだと思う。囚人にとっても、「執行」と呼ばれるその時まで、「わたし」と変わらない日常があり、紛れもなく生きている。囚人は、自分の過程で水たまりを判断した。一団となって絞首台に向かうなか、彼だけが異物というわけではなく、同じ世界を見、聞き、感じ、理解している。「わたし」と囚人の意識の間隔は「水たまりをよける」という日常的行為によって近づけられた。「わたし」は、囚人の日常の側から絞首刑を眺める位置に立ち、その時初めて「わたし」にとって日常化された死刑執行に対する、非人道的感覚に気付く。と同時に、真の日常のあるべき姿が見えてきたのではないか。

しかしながら「わたし」は、ただ一人誤りに気付きつつも、何も成し得ない。あさましくも、囚人の死をあざけるような冗談に「大声で笑った」とある。私はこの場面で、「わたし」が真実の認識者であると同時に、現実の生活者でもあることを強く印象づけられた。一人の健康な人間の生命を、人為的に絶つ事の絶対的誤りに気付きつつも、なす術のない現実の生活は、「わたし」にとって少し残酷かも知れないと私は思った。

イングルサイド

## 「炉辺荘のアン」を読んで

3 C 内田真紀

私が「赤毛のアン」シリーズに出会ったのは、今年の春でした。それまでは、10冊という数の多さに敬遠していたのです。でもいざ読み始めると、眠る間も惜しくなるほど面白くて、吸い込

まれたように一気に読んでしまいました。

アンは、何にでも感動することができ、またその感動の大部分を言葉で表現することができるのです。アンの言葉は、キラキラと輝いているように思えます。まるで、生まれながらにして、自分の人生を、より楽しく、よりすばらしいものにする術を知っているかのようです。

幼い少女だったアンも、ギルバートと幸せな結婚をし、「炉辺荘のアン」では、六人（正確には七人）もの子供がいます。炉辺荘では、毎日がとても楽しく、「普通の日」などというものは存在しないのです。幼い子供たちが次第に成長していくと同時に、アンはいろんなことで悩み、悲しみ、喜んでいます。様々なでき事の中で、特に印象に残ったのは、双子のナンとダイアナが、それぞれに崇拜しきっていた女の子の友達に嘘をつかれ、その嘘によって大きなショックを受けた、ということです。冗談一つできえ、本当のこと以外は誰も言わない炉辺荘で育った二人は、信じていた人に裏切られるなどとは、想像もしていなかったのでしょうか。人を信じるということは、たいへんすばらしいことであり、嘘をつく人には、容易にできないことです。ナンやダイアナのように、純粋な気持ちを大人になってもずっと持ち続けるということは難しいことですが、アンやギルバートは見事にやってのけています。

また、想像力の豊かなアンの性質をそのまま受け継いだのがナンです。ナンにとっては、他の兄妹と遊ぶことよりも、一人きり、想像の翼に乗って世界中を飛びまわることの方が楽しいのです。アンも幼い頃、美しい景色を見るたびに、その場所に自分なりの名前をつけていたのですから、ナンの気持ちを、たいへん深く理解することができるでしょう。ナンが、自分の想像の世界と現実とのギャップに傷つき、その胸中をアンに打ち明けた時、吹き出したいのをこらえて、いつもの真面目な顔で話に耳を傾け、ナンをショックから立ち直らせることができたのもそのためだと思います。アンの、子供たちに対する深い愛情に、私は感動すると同時に、自分がアンと同じ立場になった時、アンのようにやさしく、適切に子供たちに接することができるだろうか、という不安におそわれました。

今では私は、精神的に落ち着かなくなったり、毎日が面白くなかったりした時に、このシリーズを読むことにしています。アンの言葉のすばら

しき、愛情の深さに感動しながら読み進んでいく間に、私の心の中の霧は晴れ、知らず知らずのうちに、生きていることの喜びを感じることで自分に、再び戻ることができるのです。絶え間なく変化していく毎日に不安を抱きながらも、正面からぶつかっていき、そして見事に解決しながら生きていくアンのように、私も、自ら幸せを見つけ出しながら生きていくことができたなら、私の人生は、私の何よりの宝物となるでしょう。

## 「いまを生きる」を読んで

2 I 谷山明子

この物語を読んでわたしは、学校とはいったいどういうものなんだろうと思った。この物語は、1959年のアメリカの名門の私立学校での話であったが、今の日本の学校の方針、世の中の風潮と共通する点が多くあった。一流の大学に行かせたい親と一流の大学への進学率を高め、知名度を上げたい学校との逆えない二つの大きな力によって押しつぶされそうになっている子供。学校とは今、その逆えない大きな力の渦中にある。本来学校とは、世の中に出て役立つ教養を教わる場であると思う。受験のための勉強ではなく、自分自身がより人間的に大きくなるように、一般的な知識を身につけ、共同生活を送ることにより協力する力、団結する力を養う、これが学校の大きな役割だと思ふ。しかし、これらの役割を果している学校が実在することは難しく、また学校側もただ世の中の要望に応じているだけなのかもしれない。

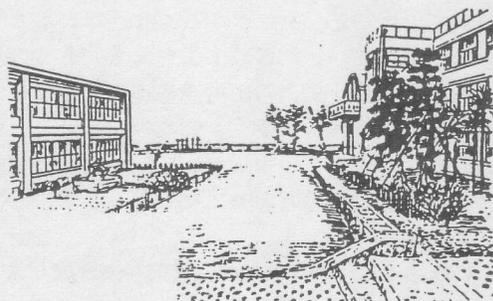
今、わたしは親にエンジニアの道を強制されて選んだわけではなく自主的にこの高専を選び、大学受験のための勉強をする必要もなく毎日学校に通っている。この物語の男の子たちのように、親と学校の要望がうずまいている学校での生活はどんなにつまらなく、窮屈なことだろう。そんな生活を送っていた彼らであったから、自由、気ままに自分たちに勉強を教えてくれるキーティング先生の存在が、気づかないうちに大きくなっていったのだと思う。キーティング先生が私立学校、ウェルトン・アカデミーに通っていたときに結成した『死せる詩人たちの会』を彼らが、再び結成させようと思ったのも、キーティング先生の存在の大きさを表していると思う。教科書の詩の価値

を数式化するような解説のページを破らせたり、教壇から飛び降りさせたり、考えてみれば、本当に信用できる先生なのか彼らも戸惑ったことだろう。しかし、今までの受験のための詰め込み教育とは違った新しい勉強方法で教わったとき、彼らは今まで求めていた自由になれるきっかけをつかんだのではないだろうか。

わたしは自分のちっぽけな考え方をより自由に、より大きく、より幅広くしてくれる人、自分のちっぽけな存在をより大きく、より確かなものにしてくれる人に出会ってみたい。この本を読んでいてそんな思いが、彼らの中のキーティング先生の存在が大きくなるにつれて、わたしの心の中に高まっていった。

わたしは、演劇の世界に自分を生かす場を見つけたが、父親の無理解のために演劇をやめさせられ、父親が勝手に描いた未来に進むことを命じられたニールが自殺したということも深く考えさせられた。彼は、自殺という行為でしか現実から逃げる道はなかったのだろうか。わたしが、もし絶望したときどうするだろうと考えてみた。きっとわたしは、反対された道に未練はありながらも親の言うことをきくだろう。そして自分が意志をもった『人』であることを忘れてしまうのかもしれない。しかし、わたしはこの物語を読んで、親に反対された道でもだれか自分が本当に信用でき、尊敬できる人が、自分の進みたい道を選ぶことに応援してくれるのなら、わたしは未来に夢を賭けてみたいと思った。

わたしは、そんなに熱く、夢中になれるものに早く出会ってみたいと思った。それが、わたし自身の「いまを生きる」なのである。



## 「縦走路」を読んで

1 C 泉 真由美

「つめたい春の雨だった。」

昭和33年刊行、新田次郎氏作の小説「縦走路」と二人の山男の熱い想いの競走がこのどうしようもない文章で終わった。

私は、やっと読み終えたのと、作品の終末がどうなったかがわかったので「ほっ」とひと息ついた。それから「はっ」とした。いつもなら、ハッピーエンドに終わらなかったらなぜか悲しくなってくるのに、それどころか、安心してしまっていることに驚いた。それは多分、この作品が恋愛小説っぽくないからだろうが、ここまで不思議に安心し、もう一度読み返してみたくなくなったのは初めてだ。

この「縦走路」という作品は、山でヒロイン「千穂」と出会った山男二人「蜂屋」と「木暮」が山をきっかけに「千穂」に夢中になり、岩場で結婚を求め、山で悲しい答えを聞く——そんな山を主とする「自然」を背景にというよりむしろ、男女間の恋愛感情のもつれを背景にといった方が良くと思われるほどさまざまな自然現象や登山の描写が非常にうまく巧みに書かれている作品である。

私はこの作品の中で気に入った所が2つある。

1つは、山の姿をそっくりそのまま描写して登山などほとんど経験したことのない私でも、その場の風景を想像することができたこと。それは私にとって何よりも魅力的なことであった。八ヶ岳や北岳の山々の美しさ、厳しさ、その描写が読んでいる私をさすがすがすがしい気持ちにしたりした。

2つめは、この作品の女性の登場人物である「千穂」と「美根子」が互いに人間のいやな部分を備えていること。それがすごく身近にいる人間を思わせていて、またこの小説をおもしろくさせていいと思った。二人の山男達も不自然でなく、自然な形で「千穂」を愛し、愛を告白したことに感心した。しかしこの小説では結局、第三者である「美根子」の思惑どおりになったところもおもしろいと思った。

この作品は、詳細な自然の風景描写より成り立っていると思う。それがたまらなく美しく、それがたまらなく力強く表現されていて、読んでいた

まらなくなった。あとがきにもあったが、これは恋愛小説として読むにはあまりにももの足りない。人物の心の描写がもう一つというところだからだが、主なストーリーをすばらしくさせるための自然、山々の状態がただただうまく表現されてあった。私が今までに読んだ小説のほとんどが人物の心の描写中心で風景の書き方にもそれがからんでくる作品であったので、この「縦走路」という作品が非常に新鮮で、何か一味違う作品のように思えた。

私にとってこの作品は、読んだ後の「こみあげてくるような感動」こそなかったけれど、たいへん読みごたえのあるものであったことは、確かである。

## 「いまを生きる」を読んで

2MA 今岡秀樹

『いまを生きる』、このタイトルはいったい何をあらわしているのだろうか。僕は別にそんなものもらしい事を考えてこの本を選んだわけではない。だが、240ページ余りにおよぶこの作品の本文を読み終えたとき、考えさせられずにはいられなくなった。

この物語は、伝統、名誉、規律、美徳という「四本の柱」を重んじる厳格な校風の名門校を舞台とし、そこを生活の場とする少年達の心をとらえたものだ。少年達は「四本の柱」に縛られ、自由を奪われている。「全ての自由を奪われた囚人」とまではいわない。しかし、現代の学生は、少なくとも僕よりは自由のない生活を強いられている。そう、奪われたというよりは最初から与えられていないといったほうが正しいだろうか。最初からないものなのだから欲しがろうともしない。そして彼らのもつことの許されない自由とは「心の自由」なのだ。

彼らは大人に逆らうことは許されない。彼らは大人の敷いてくれたレールの上を何の疑問もなく進まなければならない、そして親の考えている途中駅のみ通過し、最後にたどりつく終着駅をも自分で選ぶことはできない。もし逆らったとしても力づくでねじ伏せられ、二度とそんなおろかしい事を考えないように制裁を加えられるだけだ。そんな彼らに「自由を求める自由」を思い出させたの

はほかでもない、ジョン＝キーティング先生だった。

キーティング先生の授業は僕から見てもかなり奇妙なものだ。でも、彼は別に奇をてらって生徒の気をひくというような目的でしたことではないだろうし、生徒達もそんな彼についていったのではないだろう。キーティング先生の授業の根底には常に「自由を求める自由」の精神が生きていたのだと僕は思う。教科書の気に入らない文が書いてある1ページをやぶり捨てさせる——彼は生徒達にマニュアル人間になって欲しくなかったのだ。自ら机の上に飛び上がり、生徒達にも試させる——常に視点を交える物事を見ることを教えようとしていたのだろう。みんな同じことをする個性の無い集団など自由の精神に根本的に反したものだ。彼の授業に拒絶反応を示し、自分の殻にとじこもってしまう生徒もいたがキーティング先生は彼をあの手、この手で殻の中からひきずり出し、そして彼、トッド＝アンダーソンのかくれた才能を露見させた。そして他の生徒達にもおずおずと自由というものを手にしようという勇気が生まれ始めた。

だが、何という事だろう。キーティング先生は事を急ぎすぎたのだ。自由を得てうかれていた生徒達は、そんなことは許さない大人達に再び押さえこまれてしまった。一度自由を得た甘美な快感を突如失った彼ら。浸り切ってもはや感覚を失ってしまっているような僕にはとうていわかりはしない程の苦痛を味わったに違いない。その苦痛に一人の生徒は自らの生命を断ってしまった。これは当然キーティング先生の責任になる。何故なら、彼が生徒達を自由へあおりたてなければこんな事態にはならなかったのだから。だが、去って行くキーティング先生に内気だったはずのトッドははっきりと叫んだのだ。「悪いのはキーティング先生じゃありません。」彼らは先生をうらむどころか感謝すらしている。

僕は「自分は自由である」というふうな事を前に書いたがここで訂正したい。僕は自由などではなく、自由に溺れているだけで自分で自由をつかんではいない。ここでの彼ら、自由を手に入れる自由を得ようとする心を持つ彼らの方がいかに自由であることか。

『いまを生きる』ということとはただ惰性で生きていくことではなく、せいっぱいにいきようとする努力のことではないだろうか。

## 「人間失格」を読んで

4MA 清水裕士

不思議な気持ちになった。そして、大いに考えさせられるはめになった。普通、小説といえば、一つの物語であり、その物語の中に主旨、作者の一番訴えたい事があるものである。しかし、この「人間失格」は、小説として書かれているが、それ以上に作者の訴える勢いが強く、物語としての枠を通り越しているように思われる。たしかに、告白体で書かれている事も僕にそう思わせるのだが、それ以上にやはり、作者の激浪なる思いが読んでいる者を引きずり込んでしまう。小説であって小説でない。告白であって小説。僕にとってそんな奇妙な形をしているのがこの太宰治著「人間失格」である。

「私」を「人間失格」にしてしまったものは何だろう。

「私」を「人間失格」と思わせてしまったものは何故だろう。「私」はシズ子とシゲ子の親子の幸福な生活を目の前にして、生涯に一度だけ神に祈った。純粋な信頼心の持ち主であるヨシ子に恋をし、結婚した。つまり、それは「完璧さ」だと思ふ。人間の完璧さ、心の完璧さを求めるが故に、非完璧さが見えたのではないだろうか。人間の醜にくさ、そう作者の言う「不意に蚊を叩き殺す牛のしっぽ」である。本当の美しさ、豊かさ、つまり「心の完璧さ」の前には常に人間の陰惨な本性というグロテスクなものが存在していると僕は考える。また「私」は完璧さを真面目に考えすぎた。人間に求めすぎたのである。世間の人々、つまり「私」以外の人々は、そんな美しさ、豊かさなど真剣に考え、求めようとする人々でないから、「私」はますます孤独に陥ってしまう。「私」にとってみれば犬でもない牛でもない、人間の美しさ、豊かさを求めているのに、その人間はずる賢く、卑しいものだったから恐しく、自分でも理解できなくなり、お化けの絵を描いてみたり、自殺をはかったりしたと僕は思う。もし、「私」がはっきりと、「心の完璧さ」を求めている自分を自覚していたならば、癡人の人生をたどる事もなかっただろう。

もう一つ僕が不思議な気持ちになったのは？破滅をたどる「私」が美しく見えたのかもしれない。

麻薬に溺れ、脳病院に入れられ、狂人として、無気力に生きる「私」がなぜか美しく、それも余裕のあるキラキラと光った星の美しさとは違い、質素で、ひっそりとした、例えば冬の林のような寂しい風景、風に吹かれて、ざわめく木の音、そういう美しさが感じられた。

「いまの自分には、幸福も不幸もありません。ただ、一さいは過ぎて行きます。」

この文章が僕にそう思わせた。人間の破滅。それは呼吸が止まり、この世からあの世に行く死ではなく、行きながらにして死ぬという事だ。それは世間で並べられるどんな苦しみよりも苦しく、またその苦しみさえも笑いになり、哀しく、孤独。「私」には肉体だけが生き、精神的に死んでしまった自分がどのように映ったのだろうか。哀しくも美しい。それが僕が不思議に感じた事だった。

最後に、この小説は僕の今後の人生に大きく影響を与える予感がするのである。それはどんな意味で来るのかは解からないが、何となく、そう思うのである。狂人であり、癡人であり、「完璧さ」を求める人であり、人の本性を唯一知る人である「私」。僕はこの「私」に魅力を覚えずにはられない。太宰治。彼は神に一番近い人間なのかもしれない。

## 〔第2部 文学以外の部〕

### 「オモニの歌」を読んで

1 E 金 圭 史

初めに書いておくと、『オモニ』という言葉は韓国語で『お母さん』という意味なのである。僕がこの本を読む理由となったのは、前に夜間中学生のハルモニ（おばあちゃん）達の話も聞いたこともあり、また中学生のときの人権学習の授業でもやっていたので、ハルモニ達がどのようにしてそこで学んでいるのか知りたかったからである。それに僕自身の周辺環境も似ているところがあったからだ。僕はこの本を読んで改めて識字の素晴らしさを認識し、ハルモニ達の苦勞を知った。

この本は一人の在日韓国人玄時玉さんの夜間中学校での入学から卒業までと、玄さんの『自分史』との2部構成で成り立っている。第1部では、夜間中学校の授業の様子や、遠足、運動会、修学旅

行に行ったことなどの思い出なども書かれていた。それに夜間中学校へは在日韓国、朝鮮人のハルモニ達だけが通っていると思っていたのだが、他にも、被差別部落の人々や沖縄、ブラジル、中国から来た人々も通っていることも知って驚いた。

また、歴史についても新しく知りえたことがあった。豊臣秀吉と伊藤博文の立場が日本では英雄だが、韓国では『侵略者』であることは知っていたが、僕の祖先の地である済洲島で、朝鮮戦争の前に動乱があったことはこの本で初めて知った。

第2部はまた、玄さんの生まれたときから現在までが書かれている。玄さんは済洲島生まれで、数えて14歳のときから現在まで大阪で暮らしている。その間に、開戦、夫の徴用、空襲、終戦、夫の事故、済洲動乱、夫の死などの悲しいことがあった。でも、それだけでなく、結婚や帰郷のことなど、読む方にとってはほほえましいことも書いてあった。先に、僕自身の周辺環境が似ていると書いたが、まず最初に、僕のハラボジ（おじいちゃん）、ハルモニ達の出身地も済洲島だ。今でもそこに親戚が住んでいる。オモニが育った町が猪飼野だ（現在では公的にこの地名は使われていない）。そして僕のハルモニも昔の玄さんと同じで字を知らない。これは僕が小さいときから知っていたが僕がオモニに、

「なあ、なんでもおばあちゃん字書かれへんの。」と聞いても、オモニは、

「昔の人は、字書かれへん人多いのや。」

と言って事実を知ることができなかったが、中学生になって人権学活という授業があり、本当の理由を知った。字を知らなかった人達が一生懸命勉強している。字を知ろうと頑張っている。でも本当は、こういうことが問題なんだろうと思う。若い頃から日本で働いてきたハルモニ達が字を知らないのは、一つは、朝鮮人ということで差別されたんだと思う。それと、その時は日本語をあまり話せなかったということだろう。

僕はもうハルモニ達が夜間中学校に来る必要がなくなるようになってほしいと思う。悪い言い方にとってもらっては困るが、それだけハルモニ達が夜間中学校で勉強し、字を覚えてきたということになるのではないか。今、日本の子供達では、字を知らない子供はほとんどいないと思うが、義務教育が進んでいなくて貧富の激しい国では、識字教育が完全ではない。世界中の人々に字の書くことの喜び、嬉しさなどを知ってほしい。また、

その日が早く訪れることを楽しみに待ちたいのだ。

みんなが平等に教育を受ける権利をもち、字を読み書きするのが当たり前という世の中になってほしいと願っているのだ。識字がこの地球上で当然の義務となることが、また一つの平和につながると思はれる。

## 「まちがったっていい じゃないか」を読んで

2 I 西岡正隆

僕がこの本を読むに至った動機は、学校で配られた本の紹介のプリントを見て、今の自分に必要な本はこれだと思ったからです。小学校以来、僕はまちがいをしないようにと教育されてきたのです。人生とは「まちがいをしないこと」だと信じてきたのです。そういう僕には、まさに目からうろこが落ちる本でした。本の内容は、簡単にいうと、作者独自のユーモアを交えながら、それでも読者を説得する力のある人生論です。僕は、我を忘れる程この本に熱中して、あっという間に読み終わりました。

作者はまず、「自分自身を大事にしろ。」と主張します。「自分を大事に出来てこそ、他人を大事にできるのだ。」というのです。これは、その通りでしょう。それでは、「自分を大事にする」とはどういうことなのでしょう。説明しようと思えば難しいけれど、僕は自分に素直になることだと思っています。青春時代には、自分に素直になれなくて、間違いをおかしたり、他人を傷つけたりすることがしばしばあります。僕自身も、そういう経験はあります。自分に素直になり、他人を大事にしていくこと、それが自分自身の向上につながるし、一步一步成長して大人になっていくための過程ではないか、と僕は考えています。

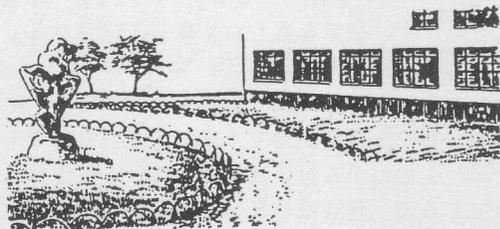
作者はまた、「人間はドジである。」と主張します。「すべての人間は、どこかしらドジなところがある」というのです。これも、その通りだと思います。完璧な人間なんていないし、ドジなところが人間らしさにつながるのではないのでしょうか。ドジなところを見せまいと思って、変に自分を飾るのはよくないと思います。作者の言葉を借りると、ドジなところが人間の愛嬌なのですから…。ありのままの自分を表現することが出来たら、どんなにすばらしいだろうと、僕は思い

ます。

作者は更に、過去・現在・未来について書いています。「若者は、過去にとらわれず、未来へ向かって生きろ。」というのです。この部分を読んで、僕は作者に励まされたような気がします。今の自分には、無限の可能性があるような気がするのです。確かに、過去にばかり目を向けていると、未来へ向かって大きくはばたけないと思います。これからは、未来を常に見つめて生きてゆこうと思いました。

作者のユーモアには感心します。例えば「人生は、ひとつのドラマで、主人公は君自身だ。」と、スケールの大きいことを突然言うのです。この意味はたぶん、自分の人生を切り開いていくのは、自分しかいない、ということだと思います。これは当り前のことだと思うけど、言葉で言うほど簡単じゃないでしょう。でも、これが出来るようになって初めて、一皮むけた大人になるのではないのでしょうか。

以上だいたいこの4つが、僕の特に印象に残った作者の意見です。この本を読んでから、また違った視野で物事を考えることができるようになりました。それに、何かいままでと違った自信みたいなものが湧いてきました。今までは少し、まちがいを恐れて人生というものを難しく考えすぎていたのかもしれない。その点作者は、人生についておもしろおかしく書いていました。僕は、人生とはそうか、こんなに楽しいものだったのか、と読んでいるうちに思ってきました。なんだか、楽しいマンガを読んでいる気分でした。僕は、作者の言う通り、人生に答えはないと思います。つまり、それほど複雑なものなのです。人生は…。それを生きてゆかなければならない、人間の宿命みたいなものを感じました。人間なんて、もともとは軟弱な生物だと思います。そこをいかに強く自分なりに生きていくか、それが我々人間に課せられた使命ではないのでしょうか。僕はそう思います。



## 「まちがったっていい じゃないか」を読んで

2 E 裏谷 豊

この題名を初めて見たとき、僕はなぜか、ふと親しみを感じた。それで、すぐに読んで見たくなった。この本は、何か大切な事を僕達に教えてくれるのではないか、そんな気がした。

この本は、著者の考え、経験などをおりまぜて、語りかけるように書かれており、非常に興味深く読むことができた。この本を読んだことにより、僕は人間の在り方、人間関係の在り方について、いろいろ考えさせられた。

内容はいろいろな章に分かれているが、その中でも僕が特に興味を持ったところがいくつかある。

まず、「すべての人間は、どこかドジなところがある。そして、大抵は、ドジなところが多少は微笑ましくもあって、その人の愛嬌になったりする。極端な言い方をすれば、ドジなところこそ、人間の根源に関わっている。」という文章だ。確かに一理ある。あの人はドジで、みっともなく、イヤなところがあるけれど、それがまたあの人らしくて、それなりにいいところでもある。そんなつきあいの方が、ずっと深みのあるものになると思う。人に好かれるのだって、ドジだけれどそこが好き、といった方が味わいがあるような気がする。ドジなところが全くない人など、つきあっても少しもおもしろみなどなく、その事が、人間としてのドジと思う。

他に、「他人の心を知ることが、いかに不可能でも、相手の心を知ることができることと信じること、決して心の通い合いを断念しないこと、それが人間の優しさだ。不可能でありながら、なおもそれを信じ続けることで、人間の社会は成り立っている。」という文章もある。これは、とても大事だが、実行するのはとても難しい事だ。人を信じるという事は、かなり勇気のいる事である。いつ、相手に裏切られ、見離されるかわからない。だが、それを恐れず、相手を信じぬく事が、相手からも信頼される事になるのだ。

この本の中で、僕が最も重要視したのは、「誤りの中からこそ真理が出てくる。」という事である。誤りをこわがるという事は、自分に自信がない事であると、著者は言う。何事も、ちょっとしたヤジウマ気分、誤ってモトモトと、気楽にやっ

た方がうまくいくのではないか。まちがえたって、その時はその時、またやり直せばいいだけの事なのだから。はじめから正しい事だけやるより、まちがいがながらジグザグに進む方が、人生だっつと楽しいのではないだろうか。

しかし、全部が全部、そういうわけにはいかない。人生には、一步まちがえば命とり、とりかえしのつかないことになる場合もあるだろう。そんな時に、自分を信じることができる者こそ、本当の人生を歩むことができるのではないか。

「人生は旅である」という言葉を耳にした事がある。山もあれば谷も、いばらの道もある。そして、人生の別れ道にさしかかったとき、本当に信じる事のできるのは、自分自身しかいないはずだ。その時に、裸の自分自身、その自分がほかのだれもない自分で、自分のドラマの主人公であることを信ずるのが、本当の自信なのではないか。この本当の自信を常に持ち続けることが、人生というものだと思ふ。

## 「落語的学問のすすめ」 を読んで

3 E 下村 信仁

この本は、落語家の桂文珍が関西大学文学部非常勤講師西田勤として、一年間講義をした内容をそのままの形で文字にしたものである。

実際、読んでみて非常に読み易くとてもおもしろかった。一回一回の講義に、それぞれ俗にいう“ネタふり”と“落ち”があるのだ。それはまるで本職の落語家の顔に戻り、高座で断はなしをしているようでもある。また、それを目の当たりにして聞いている学生達は寄席にでも来ている様な気分ではないだろうか。少なくとも、僕は読んでいてそう感じた。しかし、西田先生は講義の中で類まれな話術にのせて、僕達の為になり、また少し耳が痛くなるような核心の部分に触れてくるのである。

例えばこういう話題がある。新人類と呼ばれる僕達ぐらいの年頃、つまり最近の十代の人間は、“パラボラ世代”であるというのである。どういふことかという、物事を感覚でとらえるのはうまいが論理立てて考えることができないというのである。パラボラアンテナのように情報を収集するのはうまいが自らが情報を集めに動くことはないというのだ。僕はこの話を読んでなるほどと

思った。確かに現在、僕達の周りには数多くの情報がある。それは活字という分野、映像という分野、あるいは音という分野等に大別されるだろう。

活字による情報として本があげられると思う。僕はよく本屋に通うのだが、なるほど本屋に立ち並ぶ書籍、雑誌の数の多さには目を見張るものがあり、それらすべてを情報として処理するのは当抵、無理である。しかし、自分にとって必要、不必要なものを取捨選択すれば、訳ないことのように思える。だが、問題はそれからだと思う。果して自分に必要なものをどれだけ論理立てて考え、理解できるか。ただ、単に活字の列を目で追っただけでは意味がない。それが西田先生のいう“感覚でとらえる”“論理立てて考える”ということにつながるのではないか。また“情報集め”という点に関して言えば、本屋通いの好きな僕などは、本があまり好きでない人と比較すれば、少なくとも活字による情報集めだけは精力的に動いているのではないかと思ったりもするのだ。

映像、音の分野と言えば、テレビ・ラジオである。しかし、この2つは、自分に必要、不必要とは関係なしに、ダイレクトに目や耳から頭に飛びこんでくる。そして、それらはものすごく印象が強いために頭から離れない。少なくとも僕はそうだ。そういう点からすると本はまだ親切で、テレビ・ラジオはちょっと冷たい気もしないではない。とにかく僕はこの“パラボラ世代”の話にとっても興味を抱いた。その他にもおもしろい話がたくさんあった。落語家とは思えぬほどの立派な先生ぶりに感心もした。こんな授業だとあきることもしないだろうにと思った。本学の先生方には失礼だが、朝一番や、昼食後ポカポカ陽気の五眼目など、少し睡魔におそわれ、見事に打ち負け、敗れ去り、自らの欲望のままに眠りについたことが幾度か。そういう人間でも話を聞く気にさせてしまう。それがすなわち桂文珍のいう“落語学問のすすめ”なのだろうかと思った。

## 「母性喪失」を読んで

(島田照三・黒川新二編)

3 I 高橋美帆子

私がこの本を読もうと思ったのは、以前に読んで犯罪心理学の本がきっかけです。犯罪心理学は

犯罪を犯す直接の原因よりも、その犯罪者の背景にある生活環境や生いたちを重視するものでした。その中で、「マターナル・デプリベーション（母性的養育の喪失）」という言葉が頻繁に使われていました。この言葉は、「母親からの愛情ある養育を受けずに育っている子供の状態を指す」ものであり、これを経験すると、一般よりも犯罪に走りやすくなるとのことでした。最近、女性の社会的進出はめざましいものがあります。しかし、そのことによって子供が、この「母性喪失」を経験することが多くなるのではないかと、そう思い「母性喪失」ということをもっと深く知りたと思って、この本を読みました。

まず最初に驚かされたりは、明治・大正時代の妊産婦の死亡率の高さでした。当時妊産婦の死亡率は、現在の約30倍ほどでした。ですから、昔「母性喪失」は母親の死によるものが多かったそうです。しかしながら、昔は殆どの家が大家族制であったため、母親が死んだとしても、祖母などが代わって母性的養育を行うことも可能でした。それに対し現代の「母性喪失」は、親の離婚や失踪等によるものであり、しかも戦後の核家族化により、昔のようにはゆかなくなってきています。また、母親自身が育児の方法がわからないということや、仕事のため家にいないというようなことから、「母親喪失」となることがあるそうです。これは大変重大なことであると思います。

「母性喪失」による子供への影響としては、「表面的なつきあいしかできない」や、「根深い対人不信」などがあげられていました。場合によっては、無気力になったりもするそうです。そこで私が思うのは、たとえ母親がいても、保育所や0歳児保育などに子供を預けてばかりいれば、「母性喪失」に近い状態になるのではないかということです。現に最近では、小中学生の無気力さなどが問題視されています。それも、幼少時の母親とのコミュニケーションが少ないのがどこかで影響を与えているのではないかと思います。

「母性喪失」の中には「児童虐待」についても書かれていました。この現象は、アメリカで社会問題となり、日本でも最近増加しつつあるようです。その原因というのは「親」とはどういうものであるのか、「育児・教育」というのはどういうことであるのかについて、両親がしっかりと認識していないためだと思うのです。

私はこの本を読んで、育児や教育ということに、

